「特集・造園家（ランドスケープ・アーキテクト）に期待する」

建築家からみた造園家＜新しい職能の誕生＞

内 井 昭 蔵*

Birth of New Profession

Shozo UCHII

1. 造園とランドスケープアーキテクト

造園家というのとランドスケープアーキテクトというのでは少しニュアンスが違って聞こえてくる。名称はどうでも良いことがも知れないが、今日の造園は造園家とランドスケープアーキテクトとの相違と同じ位に変わりつつあることは事実だ。これは何も造園だけに限られたことではなく建築についてもいえることである。一口で言えばその職能の変化、職域の拡大、境界領域の相互侵蝕ということであろう。

もともと庭は建築、あるいは工作物と密着していたもので自然と人間生活とを結びつけるためのものであった。且つて人類は最初、自然の中に建築を建てた場合、周囲の自然に手を入れ、樹木や草木、水、や岩石などを意識的に動かし配列することから庭づくりは始まったに違いない。それら身近な樹木や水を意識的に配置することで自然の秩序を表現することを学んだのだと思う。庭はこれまで人間の理想郷やパラダイスを表現する場として様々な形式や形を生んできた。このように人間の自然観をもとに構築された外部空間をつくることを造園といっていたと思う。

しかし、わが国で造園家という職能が生まれたのはごく最近のことである。これは建築家の場合とよく似ていて、造園に当たったのは所謂植木職人であった。勿論、職人だけでなく作庭家というべき立場の人の存在はあったが、それは造園家というよりむしろ発注者、クライアントに近い存在であって専門職としての造園家の出現は社会の近代化を待たねばならなかったといえる。

その造園家が今度はランドスケープアーキテクトといわれるようになったのは対象とする庭の概念が変わり、対象とする範囲が地球規模となったということであろう。つまり庭といった自然の系を組み込んだ人工的環境は従来の造園のように限られた垣根の内側だけでは処理できなくなってきたことが理由として上げられる。

わが国の伝統的造園の手法は自然の系を巧みに取り込み、地形や気候、気象条件、植物、水利などを自然に同

化させることにあった。更に借景などの手法をはじめ、広範囲に亘る景観上の配慮や工夫がなされ、自然と人工の有機的調和を追求した。この点はランドスケープ的であったといえるが、問題なのは自己中心で作庭の原理が内側に向かう方向性が強く、その結果、あるがままの自然と人工のダイナミックな対比や調和といった外に広がる人間の心を抑えてしまったように思われる。しかし、内に向かう心と技術は精神性の高さを生み、抽象的な象徴主義が日本の独自の庭をつくったわけで決して悪いことではないが、ランドスケープといった場合は内に向かう原理と共に外に開いた方向性も同時に持たねばならないと思う。つまり個を中心とした方法と、全体からの視点との調和が大切なのである。これまでの造園はこのような庭の構造に対する方法が確立していなかったのではないかと思われる。私は今こそ庭とは何か、ということ問い直す時ではないかと考えている。

2. 庭の構造

私は庭は人間生活に欠くことのできない空間であると思っている。家庭というように家と庭とは不可分であってどのような家も庭を持つべきである。たとえ集合住宅といえども庭がなければ完全な人間生活は営めない。しかし今日の都市化の現実を見れば、たとえ猫の額といえども自然の土の庭を持つことは困難である。このような状況の中で庭は都市の中でどのような位置と構造を持たねばならないものだろうか。

私は都市を人間の生活空間としてとらえるとすれば、「へや」と「にわ」という3つの空間要素の結合関係でとらえるのが良いと思っている。「へや」は住宅の中の個のレベルの空間である。この「へや」が「都市」といった公のレベルまでの間に私達は様々な段階の空間が設定されていると考えられる。大きくとらえるとすれば、私、共、公といった3つのレベルである。「にわ」でいえば、私庭、共庭、公庭ということになる。「みち」でいえば私道、共道、公道である。

*建築家

都市は私と公の間に様々なレベルの空間が存在するが、その中に「にわ」の要素も細分化され、それが「みち」と複雑にからみ合って豊かな都市環境をつくる。

成熟された都市環境はこの私、共、公、の空間の結合

公共

庭の構造

形態が多様に展開されているのである。私達はこれまで私庭については様々な手法を持っていた。自己表現、或は宇宙観の表現の場としての日本の庭は世界に誇るべきものとなっている。しかし共庭、公庭（パーク）に対するとり組み方はまだ端緒についたばかりである。

ランドスケープアーキテクトとは私から公に亘る連続した庭のあり方を常に考える立場の人であると思っている。

3. ランドスケープアーキテクトの役割

庭は人間の精神をリフレッシュさせ、野外生活の場としての役割をもつ。たとえテラスやバルコニーであっても、それが共庭とつながり、公庭に連がれば本来の役割をかなえることができる。今日の「にわ」は分断され、孤立している「へや」や「集合住宅」「住宅団地」や「地域」を1つに有機体として連続される重要な役割がある。その連続性をもたらすものは大地の起伏であり、樹木や森林であり、水の流れである。それらは風景と一体とな

り景観をつくる。従ってこれまでのような植栽は植木職人、川は土木エンジニア、建物は建築家といった縦割り分業ではランドスケープデザインはできなくなってきた。水質や土壌の専門家、気象学者、土木エンジニア、植物学者、動物学者、歴史学者、心理学者、芸術家、デザイナー、法律家などの様々な専門家が集まり、それらの知識や技能、芸術的感性などをまとめることが必要となってきた。これこそ総合科学であり、総合芸術であって文化そのものである。

このような広範囲な情報をまとめ、コンセプトを構築し、コーディネートをする役割はまさに現代の新しい職能なのである。なぜならば、全人類の共有の風景や都市景観などをつくり、自然を守るには高度の専門知識経験の他に倫理性を備え、第三者性といった無私の精神をもった人でなければならないからである。このような新しい職能は果たして日本に定着するのだろうか。

建築家の置かれている現状をかえりみると前途は多難と推測できる。しかし地球時代に入った今日、困難は克服しなければならない。

4. 今日の造園家の問題点

私もこれまで理想的なランドスケープアーキテクトのあり方を捜し求めてきた。何人かの優秀なランドスケープデザイナーとめぐり逢うことはできたが、日本の現状ではそれらの人々の意図が生かされているとは言い難い。社会がその存在を知らず、又求めていないのは問題だ。教育もほとんどアメリカの大学で治めてきた人であって、まだまだ自前の教育が行き届いていない。どうしても造園系の人々の固定した考え方が強く、現在ではむしろ立体造形家や彫刻家などのアーティストの方が柔軟な発想を持っているように思われる。

私は植物の専門家の側からでも、水の専門家の側からでも、建築家の側からでもランドスケープに挑戦すべきであると考えている。それぞれの立場からの発想が大切であろう。私も最近いくつかのランドスケープを手掛けたが、現在計画中の滋賀県立大学のキャンパスプランニングは立場はマスターアーキテクトだが、キャンパス全体のランドスケープデザインのコンセプトをつくり、各ブロックアーキテクトと協力して進めている。場所は彦根市にあるが、琵琶湖といった自然の景観を生かし、水濠をめぐらせて水を主体としたランドスケープデザインをしている。これは環境科学を柱とした新しい学部構成の大学の教材としてランドスケープデザインの壮大な実験でもある。